

教育目標 児童生徒一人一人の自立と主体的な社会参加を目指し 生きる力や豊かな人間性を育む

育てたい資質・能力

	知力 かんがえる				ふるまい あいさつおもいやり				達成力 やりとおす	協働力 力をあわせる	貢献力 みんなのため	
	小学部	中学部	高等部	寄宿舎	小学部	中学部	高等部	寄宿舎	小学部	中学部	高等部	寄宿舎
目標	・経験を積み重ねることで、自分なりに工夫しながら活動し、さらに興味・関心を広げる。	・学習や生活上の課題に気づき、調べたり考えたり話し合ったりしながら、自分のできることをやってみようとする。	・身の周りの事象に課題意識をもち、これまで身につけた知識や技能を活用したり、応用したりして課題解決に向けて取り組む。	・自らの生活を豊かするために、必要な知識や技能を学習会や日々の生活で身につける。	・自分からあいさつをしたり返事をしたり決まりを守って遊んだりする。 ・部分的な支援で身の回りのことをする。	・学校生活や地域生活のルールやマナーを守り相手の気持ちを意識して行動する。 ・日常生活において、自分のできることに自分から取り組む。	・社会生活の中のルールやマナーを守り、誰もが安心して過ごすためのふるまいについて考え行動する。	・集団生活でのルールやマナーを守り、相手のことを考えて行動する。	・自分の目標をもって挑戦したり、自分の役割を理解し、部分的に支援を受けながら最後まで取り組んだりする。	・気持ちや考えを適切な方法で伝えたり受け止めたりしながら、友だちと1つの事を一緒に行う。	・学校や地域の一人として、課題解決のために何ができるかを考え自ら実践する。	・お互いの生活がよりよくなるように、みんなのために自分のできることを考え取り組む。
具体的方策	児童が「自ら学ぶ授業」に向けて、児童一人一人に丁寧なアセスメントを行い、その結果を基に、児童の「気持ち」と「思考」にアプローチした児童主体の授業づくりとその改善に取り組む。	体験的な活動を行う場面で今までの知識を基に考えたり振り返ったりする場を学習過程に適切に設定する。	・国語、数学の授業づくりにおいて、思考を深めるためのしかけ作りをする。	年間を通して防災、健康、食生活、マナーなどの勉強会を行う。	児童が日常生活の中で適切なふるまいを意識し実践できるように、道徳科のねらい(特にB:人との関わり)を踏まえた授業実践をする。	生徒自身が必要な場面や場所でのふるまいについて考える時間を設ける。	・学部集会・ホームルーム活動、道徳科において、ルールやマナーについて生徒自身が考える機会を設定する。	集団生活におけるルールやマナーを知る機会を設ける。	各学年の地域と関わる学習において、学習シートを活用し、児童に身につけてほしい力を明確にした授業づくりとその改善に取り組む。	学習の中での力を発揮したり、振り返りで自分のよところを知ったりする機会を設定する。	各作業班で地域貢献の単元を設定し、来場者のためにできることを考え、実践する販売会(はまようまつり、たまも市)をつくる。	日々の生活や行事などを通して、みんなのために自分ができることを考える場を設定する。
成果	すべての学年で一人一人の興味・関心や実感を丁寧に把握し、安心して学習に参加できる環境をつくることで、学びに広がりが見られた。写真・イラスト・具休物、手本や手順表等の個に応じた支援ツールを用いたり、気持ちカードや手話などの表現方法を工夫したりすることで、「考える・選ぶ・伝える」場面が増え、自分から取り組もうとする姿が見られた。	地域との学習や防災学習では、体験、話を聞く、調べ活動を通して自分のできることを考えるようにした。様々な情報収集の仕方を知り、自分の生活の中で実践できることを考える姿が見られた。	学年や実態別の教員グループで生徒が思考を深めるしかけ作りについて協議する場をもった。他グループの実践を参照して、授業展開を工夫することができた。しかしながら、生徒の主体的に考える力の向上に十分につながらなかった。	避難訓練や健康指導、食についての勉強会を定期的に行ったことで、生活を豊かするために必要な知識や技能を主体的に身につけることができた。	すべての学年で全教育活動を通して、相手を意識した挨拶や返事、きまりを守ることを繰り返して指導した。ルール遊びや係活動、校外学習・修学旅行などの目的意識をもちやすい場面を設定したり、合言葉やイラスト、写真、役割設定などの手立てを行ったりすることで、相手を意識した行動や児童自身が自ら実践する場面が増えた。	ルールやマナーについて、生徒の実態に応じて方法を工夫して示したりすることで、自分たちで確かめたり、自分自身のふるまいを振り返ることができた。常にふるまいを意識することはまだ難しいが、限定した場面ではふるまいを意識し、挨拶をする、廊下は歩くなどを意識して生活する姿が見られた。	月1回の学部集会で、生徒がルールやマナーを考える機会を設定した。教員が一方的に指導するのではなく、何故そのルールが必要なのか、生徒自身が考えることを大切にしたい。生徒の気になった行動について、その都度声をかけて対応した。すぐには生徒の行動は変容しないが、指導方針を共通理解して対応した。	友達との距離のとり方や物の貸し借り、部屋での声の大きさ等、皆が気持ちよく生活するためのルールやマナーを考え実践することができた。アンケートの結果をもとに生活で困っていることなどを生徒間で共有することで、マナーを守って生活しようとする意識する様子が見られた。	すべての学年で、地域との学習を通して、児童が主体的に取り組む自分役割を意識して行動する姿が見られた。地域の方との交流や校外学習、神楽、角寿司づくり、町探検などの体験に関心を持ち、達成感を味わうことができた。しおりや合言葉、写真、学習シートなどを活用して見通しをもち、活動を切り切る姿が多く見られた。	学部、学年、学級などいろいろな集団で学習する機会をもち、友達との関係づくりをしながら他者を理解する学習をした。特にグループ活動では、自分の意見をもち、リーダーを中心に互いの意見を伝え合ったり、他者の意見を受け入れながら話をしようとする姿が見られた。	各作業班で、作業種々の特色を生かしたり地域資源を活用したりして、生徒が学校や地域のためにできることを考え貢献する活動を設定して取り組んだ。生徒が貢献できた活動と振り返る姿も見られた。	当番活動や寄宿舎の行事では、自分ごとだけでなく周りのことまで考えた言動が多く見られた。2学期から設置した意見箱に、みんなの生活をより良くするための意見が投稿されることもあった。しかし、生活アンケートの結果では、自分が生活の中でみんなのために貢献していることにはないと感じている生徒が多かった。
教職員評価	3.5	3.3	2.8	3.3	3.3	3.2	2.8	3.4	3.2	3.3	3.0	3.2
保護者評価	3.6	3.4	3.2	3.9	3.6	3.4	3.3	3.7	3.3	3.6	3.2	3.7

4: そう思う 3: ある程度そう思う
2: あまり思わない 1: 全く思わない

社会で生きる力の育成

未来のためにできること その一歩を はまようから



みんなが住みやすい町にしよう

(人権・福祉・消費・防災・健康・平和・労働)



自然を守ろう

(環境・資源・エネルギー・気候変動・生物多様性・海洋)



伝統文化を受け継ごう

(地域の文化財 伝統文化を受け継ごう)
～石見神楽・郷土料理・方言・華道茶道・石州瓦・石州和紙～

教育課程

具体的方策	成果	教職員評価
地域と連携した共同学習 (R7重点目標)「教える」教育から「学ぶ」教育への転換 (R7重点目標)地域と共に学び合う学校づくりの推進		
研修部 児童生徒が自ら学ぶ授業の展開について、イメージが膨む学部研の協議、協議方法の設定を行う。	「子どもが自ら学ぶ授業のありかた」について教員間で活発に意見交換できるように、学部研究会の協議を設けた。自分の実践をもちよったり、その授業から参考にした点を確認したりすることで、目指す授業のイメージを共有できるようにした。引き続き授業づくりの要点を整理し、子どもが自ら課題解決に向かう授業を推進していく。	3.1
地域連携センター ESD構成概念の視点を踏まえた授業づくりができるように、コーディネーターとの授業打ち合わせ会を運営する。	授業打ち合わせ会では、授業者とESDとの関連を踏まえて具体的な学習展開を一緒に考えるようにした。また、地域連携コーディネーターからも助言をもらいながら授業づくりの協力を行った。	3.1
キャリア教育の推進 (R7重点目標)地域と共に学び合う学校づくりの推進		
進路支援センター 職場開拓や職場見学、学校見学を行い、地域の福祉事業所やグループホーム、企業に浜田養護学校の理解啓発を図る。	小・中・高・舎の教職員に協力してもらい、職場開拓をした。職場開拓を通じて、学校の様子や企業の方に知ってもらえることができた。現場実習や職場見学、進路だより等を通じて福祉事業所、企業の情報を提供できた。	3.2

成果	改善点
今年度から校内研究のテーマを「一人一人のWell-beingを目指した児童生徒主体の授業づくり～児童生徒の協働的で多様な学び方を保障する手立てを考える～」とし、児童生徒が自ら学ぶための手立て等を協議しながら授業実践に取り組んだ。研究を通して、児童生徒が自己決定する場面を多く設定したり、思考を深めるためのツールを工夫したりするなど、授業改善を図ることができた。また、地域との協働学習では、授業の計画段階から、本校の地域連携コーディネーターに助言を受け、多様な観点から改善することができた。その結果、各学部において、地域資源を活用した学習や地域貢献活動に主体的に取り組む児童生徒の姿が見られた。 また、夏季休業中には、現場実習を受け入れてもらえる職場を開拓し、本校の理解啓発を図るとともに、進路学習の充実を図るための基盤を整備することができた。	引き続き「教える」教育から「学ぶ」教育への転換が推進されるように、児童生徒が試行錯誤しながら学ぶことや課題解決の方法を自ら方向づけていく授業を目指して改善を図っていく。そのためにも、教員間で目指す授業像を共有し、有効な手立てを明らかにしながら校内研究を進めていきたい。特に地域との協働学習では、学校運営協議会での協議を生かして、児童生徒自身が取り組む価値や学ぶ価値を感じられるように、題材や学習プロセスを工夫していきたい。今年度の「知力」の評価において、「主体的に考える力の向上に十分につながらなかった」という評価があったが、児童生徒が「学ぶ」教育を推進することが、主体的に考える力の育成につながると思われる。 また、引き続き職場開拓をしたり、教職員向けの職場見学を設定したりするなど、地域と連携しながらキャリア教育の充実を図ってきたい。

外部評価者からの意見(一部)

高等部の教職員評価で低いところがあったが保護者評価はそうでもなく微妙に差が出たのが興味深かった。「教える」教育から「学ぶ」への転換が、自らの知・技を高めて、将来の生活を豊かにするための力を付けている。成果として、校内や地域で協力しながら結果を出されている、とても良い。主体的に考える力を身につけるには、意見を言い合う場を増やすことと失敗しても責められない環境があると挑戦しやすくなる。その中で学校外の地域の人達とのつながりも良い機会になる。地域と連携・協働した学習が、ひとつひとつ形になって実践されてきている。各目標・成果に対する教職員評価より保護者評価が高いことから、家庭でお子さんの成長を認識されており、学校の取組に対する保護者の満足度が高い。学ぶ授業への転換を加速してもらいたい。子どもたちが地域の方や先生方に支えられながら自ら学んで成長している。様々な資源(ひと・もの・仕組み等)を活用して、具体的な改善策が着実に図られている。基礎的・集団的な学びは確保しつつ、ユニーク(固有の)なパス(道)としての学びの個別最適化をどのような指標で測っていくかについても、今後検討していく必要がある。